千葉経済大学短期大学部
研究紀要　第19号　37～42（2023）
研究ノート

千葉県内私立幼稚園の昭和初期の保育内容２

― 自然を取り入れた保育者 ―

浅川　繭子・中島　千恵子・鍜治　礼子（日出学園幼稚園園長）

問題意識

前回の研究ノート（2020）では、昭和初期の成田幼稚園と日出学園幼稚園の保育内容を検討した。成田幼稚園は千葉県内の私立幼稚園として最も歴史があり、明治38年の創立以来、園舎など設備や保育内容の整備を進め、明治から大正、昭和初期にかけて、県内では幼稚園教育の見本となるような幼稚園であった。環境としては、敷地が広大であることや自然環境が豊かであることを生かした特徴のある保育を実践していた。

日出学園幼稚園は地元有志の会によって昭和９年に市川市菅野に設立され、昭和37年まで勤務した土屋真砂子（まさ）が中心となって、自然とのかかわりを生かす保育を主導していたということであった。

成田幼稚園も日出学園幼稚園も自然とのかかわりを重視していた幼稚園だが、成田幼稚園は広大な敷地や自然豊かな立地を生かした自然保育、一方、日出学園幼稚園は園庭に草花を育てて自然環境を構成し、保育者が草花を育てるように、子どもにも細やかに保育することを重視していたことがわかった。

今回の研究ノートでも引き続き昭和初期の千葉県内私立幼稚園の保育内容の実際について検討していくが、保育の中に自然とのかかわりを取り入れることを主導した保育者に焦点を当て、その意図を探っていく。

成田幼稚園・山口政子（まさ）について

成田幼稚園史（昭和50年）によると、大正３年10月から保育主任に就任した山口政子（まさ）は、明治７年徳島の出身で、東京女子高等師範学校保育科ならびに国立音楽学校ピアノ選科に学んだという（Ｐ111）。

大阪の汎愛幼稚園、東京の江東幼稚園、満州奉天の蒙養院を経ての着任だったという。山口政子（まさ）は、戦後まで保育主任として成田幼稚園に長く勤務し、幼稚園設備の整備と新任教員の採用の責任者を務め、昭和14年４月以降は経営の責任者も務めたということである。保育主任として長く成田幼稚園の保育を主導し、周囲の豊かな自然環境を生かした保育を進めた。なお名前表記は、成田幼稚園史においては「政子」とあるが、東京女子師範高等学校の修了の記録を見ると「まさ」とひらがな表記になっている。教員生活において長く「政子」が使用されたことから、本稿では以降「政子」を使用する。

山口保育主任は、成田幼稚園の芝生が一面に植えられた庭を大切にしていた逸話が紹介されている。

> 大正８年１月20日～21日の２日間、園庭を成田町の消防隊に貸し出した。初日の午後4時頃山口主任が出張から帰ると、たき火の跡の始末が悪く、各所共乱れがちのままにしてあり、さらに平素大切にしていた芝生の土手の一部が十間焼き払われているのを見て、好意をもって貸したのにと早速成田警察署に電話し、注意をした。（要約筆者、仮名遣い等も現代に直した。）

> 大正10年、東京の瑞光第三小学校の職員数名が、生徒200人を引率してきて休息のため園内の芝生をしばらく借りたいということで、山口保育主任は旅の疲れに同情し貸与したが、飲食物の散乱や包み紙などの飛散、手入れ中の花壇に乱入する者にも注意せず、後始末もせずに帰校してしまった。園内見学をした職員もまた態度が悪かったことで、日誌に痛烈な批判を記載している。（要約筆者、仮名遣い等も現代に直した。）

園庭の芝生が傷むようなことや、園内を汚されることには大変立腹されていた様子であった。本文中に「これらの話から、山口保育主任がいかに庭園を大切にし

たか理解されよう」（P113）という記述がある。山口保育主任が園庭をきれいに保つことを重視していたことは関係者には広く知られていたようである。

山口政子保育主任自身による手記が昭和２年の「幼児の教育」十月号に掲載されている（Pp.27－30）。成田幼稚園についての紹介である。まず、園の概要を紹介している。

> 当園は関東の霊場として広く世の人に知られている千葉県成田山新勝寺が明治38年６月日露戦争の（戦勝）記念として向台という高燥な一区域に設立されたものである。
>
> 成田山では、中学校、高等女学校、図書館、感化院とこの幼稚園を併せた五事業を経営している。
>
> 園の敷地は3,189坪、職員室、保育室、園長室兼図書室、応接室、静養室、玩具室、遊戯室、２棟の附属住宅、小使い室等が約300坪の建坪である。
>
> 幼児は100名を４組に編成、３年保育で、年少は20名が限度､100名を５人の保姆で分担している。（要約筆者、仮名遣い等も現代に直した。）

成田幼稚園は、当時珍しい資金潤沢な幼稚園で、貴重なピアノが整備されているほど設備もよかったが、次の保育の紹介では、園庭の自然物を多く紹介しており、手記４ページのうち３ページほどが自然物の話題である。

> 遊園は、2800余坪全部芝生である。花壇、藤棚、砂場などがあり、幼児１人30坪近くなる。園内の桜は美しく、秋の紅葉も園内を彩る、庭にはタンポポが緑の芝生の中に黄色く萌え出で、クローバが白く咲くのも奇麗である。たくさん咲くりんどうは幼児の手にとるにふさわしい。小さなエンドウ豆も幼児の心を喜ばせる。摘み取った小草は幼児のままごとのご馳走に･･･（中略）・・・広い庭にはいろいろの虫が幼児を喜ばせたり、お話の材料となる。
>
> 春は花の下に、秋は紅葉の散った芝生の上でのお弁当も楽しい。ザクロの木に実がなると幼児の作ったカバンに入れてお土産にする。（要約筆者、仮名遣い等も現代に直した。）

また、栽培についても記述がある。

> 初夏の頃、10坪程の畑に大きい組の幼児達が３粒ずつ種子を蒔いた落花生の花が咲いた。ある日まだ実っていない落花生を少し掘り出して、大きくなるまでの成長順について面白く観察をした。甘薯（＝サツマイモ）も大きくなってやがて堀り取る楽しい日が近付いている。（要約筆者、仮名遣い等も現代に直した。）

山口保育主任自身が成田幼稚園の自然を心から愛し、自然にかかわる幼児の生活を楽しみにしている様子が伝わってくる。その他、千葉県名産のキノコや栗の木の紹介、成田山の整備した近隣の公園でのどんぐりや椎の実拾いも文中に紹介している。

手記の最後には、

「私はいつも自然の天地に恵まれた幼児達の幸福を感じます。狭くはない園舎内で唱歌や遊嬉をしたり、画を描いたりお話したりいたしますが、それよりも広い庭、少しも危険のない静かなみどりの庭、移りゆく四季折々の自然の庭に幼児の心を美しく又やさしく導かれてゆくことを嬉しく思ひます。そうしてかかる環境で幼児の談し相手となっていることを幸と存じます。」（下線は筆者による。）

と、山口保育主任の保育観、子ども観が表現されている。この手記の時、山口保育主任は成田幼稚園に勤務して約10年である。成田幼稚園の自然環境を心から愛し保育に生かしていったのであろうということが感じられる。

日出学園幼稚園・土屋真砂子（まさ）

前回の研究ノートにおいて、昭和９年開設の日出学園幼稚園の保姆であった土屋真砂子（まさ）を紹介した。土屋は、昭和37年の退職まで日出学園幼稚園の保育を主導し、特に自然についての保育を重要視したと

されている。名前の表記について、当時の日出学園幼稚園の小柳篤二園長によると本名は万葉仮名の「まさ」であるということだが、本人の署名は「真砂子」としていたということである（「土屋先生の思い出」より）。本稿では「真砂子」と表記する。

土屋は、明治38年千葉県山武郡瑞穂村永田の農村に生まれ、大正10年に千葉県女子師範学校に入学し、在学中は首席を続け級長を務めた。大正14年に千葉女子師範学校を卒業すると、幕張小学校訓導に任ぜられ、同時に千葉県女子師範附属幼稚園の保姆も兼任し、分校である幕張農村幼稚園に赴任した。

このことについて、互いに新任で一緒に「幕張農村幼稚園」に赴任した山村きよは、昭和37年の土屋の追悼文集において、農村幼稚園で勤務した当時の苦労や楽しさを記している（「土屋先生の思い出」Pp.55-57）。また、「幼児の教育」（大正15年１月号）に次のように寄稿している。

「新任、しかも初めて出来る、そして農村の子供を、この三つのことに大きな理想を描いて赴任したのはこの四月でした。いよいよ実際の任に当たることになって千葉県女子師範学校長平田先生及び附属小学校主事土屋（敏雄）先生からこの幼稚園設立についての趣意を伺いました時にはほんとにびっくりしました。無経験な私にはあまりにも責任が重いのに驚かされたのです。なぜならば午前中は小学校の低学年を、午後からは幼児の保育に当たらねばならなかったのです。（原文）」（仮名遣い等は現代に直した）（Pp.30-31）

土屋は千葉県女子師範学校を修了した新任、山村は東京女子高等師範学校を修了したところであった。山村はまた、赴任当時の幕張農村幼稚園について次のように記している。

幼稚園とは名のみで園舎はなし、経費はなし、保姆二人に105名の園児でどうしようかと、途方にくれてしまいました。（中略）勿論今までとは別の形式をとらねばなりませんでした。　もっとも始めの内は千葉の本園からも出張して戴きました。（中略）私も夢中で兎に角、子供の来ている三時間余の間を無事に面白く遊べる様つとめながら不安な日を続けました。しかし幸に子供のお気に入りの場所となって毎日の出席は50人を越えました。（要約筆者、仮名遣い等も現代に直した。）

この農村幼稚園の環境については、以下のように記載されている（Ｐ33）。

五月開園当時から２ヶ月間は以下の設備
１、園舎＝小学校１年の教室２室を使用す。
２、遊園＝小学校運動場の一部分を使用す。
３、保育具は、１.オルガン１台、２.手技材料、３.砂遊び道具（シャクシ30本、貝殻等）（要約筆者、仮名遣い等も現代に直した。）

２学期以降揃ったもの
１、ブランコ４台
２、移動式すべり台、２台
３、子供用黒板（二尺　巾一間のもの４枚）
４、ままごと道具並に毬（６インチ４個、７インチ２個）
５、紅白の旗50本
６、三寸巾五尺の煉瓦型積木30個及び小さな木片小ざるに三ばい。
７、絵本30冊（子供の國の月おくれを集めている）（要約筆者、仮名遣い等も現代に直した。）

通ってくる園児の数に比べると、遊具が豊富にあったわけでもないことから、自然と屋外の遊びや自然物に目が行くような環境であったと思われる。土屋と山村は共に新任教員の時期を幕張で過ごし、物や資金が乏しい中で工夫しながら保育を進めていった。土屋は昭和3年3月まで本園に勤務し、その後国府台女子学院附属東華幼稚園へ、また、昭和９年４月から東華幼稚園が日出学園幼稚園に移管となったことで日出学園幼稚園に勤務することになった。幕張農村幼稚園で、師範学校を修了したばかりの新任の保育者として山村と二人で保育をしていたこの数年が土屋の自然保育の端

緒となっていると考えられる。

幕張農村幼稚園での土屋の様子を、千葉女子師範学校時代の恩師である土屋敏雄氏が書いている。(「土屋先生の思い出」Pp.44-49)

「『黒くなって働く』という言葉はあるが、就任後のまさは、実際土埃を浴びつつ、理髪の暇も惜しんで精力的に活躍していた。」

千葉女子師範学校時代の土屋は、級長を務め、成績も大変よく、模範生であったようである。また律儀で品行方正、それだけでなく気が利き、教育に対して忠実であったと評されている。土屋敏雄氏はそのような「まさ」を見込んで、幕張農村幼稚園に配当したと述べてもいる。「ここに遣る者はまさ以外にはなかったのである。」(P47) その精力的な様子は一生続いたようである。

この時、千葉女子師範学校の校長は平田華藏であった。平田氏と土屋氏は女子師範時代の土屋真砂子を高く評価し、両者が差配しての土屋の農村幼稚園勤務であった。そして、土屋真砂子は期待に応えて農村幼稚園での保育実践に尽くし、昭和３年に平田華藏によって市川の東華幼稚園へ移ったのである。

幕張農村幼稚園とは

大正14年の千葉教育１月号は、幼児教育特集号となっている。そこには千葉県内の教育の第一人者達が幼児教育について寄稿している。「農村の幼児教育の必要性について」という章は、個人名ではなく千葉女子師範附属小学校の筆名で、主に農村幼稚園の理想が語られた。幕張農村幼稚園は大正14年５月に開設となっているが、それ以前に千葉県の教育会では農村幼稚園の必要性が議論されていたようである。この号には大正13年10月21日22日の千葉県女子師範学校における研究会の様子も掲載されている。ここでは、千葉教育会の会員が幼稚園のいわゆる公開保育を見学し（2020年研究ノート)、その前後の時間に討議が行われた。その中に、農村幼稚園の設置について千葉県当局に建議することを審議し、満場一致で可決されている。

(建議案)
女子師範学校附属農村幼稚園を設置することを県当局に建議すること
理由　農村幼稚園の普及発達をはからんにはこれが指導並びに研究をなす機関の設置とこれが保育の任に当たる者の養成とを必要とする。之の意味に於て女子師範学校に現在の幼稚園の外に農村幼稚園を設置して一は研究の便に供し一は実習指導の源泉地たらしむるを適切と認めここに翻案を提出すつ所以である。
提出者　石井惣治（要約筆者、仮名遣い等も現代に直した。)

明治時代にも、幼稚園の普及、設置のために文部省から通達が出されたが（文部省達第三号、明治17年２月15日)、千葉県では当時は実施困難な状況で幼稚園の設置は進まなかった。千葉県としては、本格的な幼稚園の設置に限らず簡易な編成や学校の一部を充てる園の設置も可能としている（千葉・市原郡役所文書乙第二百十八号)。千葉県内の幼稚園の設置は私立佐原幼稚園が最初であり（明治23年)、公立としては大多喜小学校付属幼稚園が明治28年に設置された。

その後、千葉県内でも幼稚園の設置はいくらか進み、大正末の数値は明らかではないが、昭和はじめの千葉県内の幼稚園数の状況は公立が15園、私立が14園となっており、小学校教育も進むにつれて幼児教育の必要性を感じる県関係者が多くなっていたことが伺え、前述の大正13年の幼児教育研究会においての建議になったものと思われる。農村幼稚園は、実験的な性格があり、開設後は参観者なども来るようになったということである。

土屋真砂子は、恩師平田華藏の導きによって、市川の東華幼稚園、日出学園幼稚園と勤務するが、亡くなる昭和37年まで精力的に幼稚園の保育に尽くしていた。自然を重視するようになったきっかけとして、自分では田舎育ちであったことをまず挙げている。(2020年研

究ノート）その素質を見込まれて農村幼稚園への赴任となった。また、次のきっかけとして自分の修養のために始めた生花や茶道の影響があるとも述べている。(「土屋先生の思い出」Pp.23-25)。亡くなる少し前の講演では、以下の様に述べている。

「ほどほどの小さな花でもいい、よそのお家で作ったのはこんなに大きいのが咲く時に、幼稚園ではこんな小さいのしか咲かないという事がございますけれども、それも一つの経験であって、自分の力で、子供といっしょの力で咲かせるという楽しみをそこに見出しました。（中略）そして花を育てる、動物をかう、小さな虫をかうという私達の細やかな気持、それが幼児の保育をするという細やかさに通じて行くものではないか、そしてその花を育てるという細やかなものは無駄ではないという事をここで考えたのでございます。」(「土屋先生の思い出」P25)

生来身に付いた自然を愛好する気持ちが、長年の保育に強く生かされていたものと考えられる。それは、農村幼稚園での土埃にまみれた経験の反動とも考えられる、小さな自然をも愛する気持ち、細やかな保育を志向する気持ちにつながっていたようである。

まとめ

これまでの研究ノートでは、昭和初期の保育内容について検討してきたが、昭和初期は幼稚園令が大正15年に出されて以降、幼稚園独自の保育内容を確立しようという時期にあたる。成田幼稚園では明治以降の歴史があり、設備も充実して県内の見本となる幼稚園であった。保育主任山口政子が主導して、その豊かな自然環境を生かした保育が実践されていった。今回の研究で山口政子自身に焦点を当てた時、山口保育主任が心から園の環境を愛した強い気持ちが感じられた。

一方、日出学園幼稚園に長年勤めた土屋真砂子は、保育者としての生活を実験的な幕張農村幼稚園から始め、物が乏しい中で農村の子どもたちと過ごした。自然しかない、と言ってもよいくらいの環境であった。そこで経験したことは骨太の経験であったものと思われるが、自然に対する素質を見込まれての赴任であった。後に日出学園幼稚園では小さな自然も愛好して細やかな保育を志向していった。

両保育者に着目することで、両方の幼稚園の自然保育の特徴が浮き彫りになり、昭和初期の千葉県の都会とは違う保育内容の一端が明らかになった。

引用文献

(掲出順)

中島千恵子・鍜治礼子・浅川繭子 「千葉県内私立幼稚園の昭和初期の保育内容」 千葉経済大学短期大学部研究紀要第16号　Pp.51-56　2020年

成田幼稚園 「成田幼稚園史」 1975年

山口　政 「成田幼稚園」 幼児の教育　日本幼稚園協会　第27巻10月号第9号　Pp.27-30　1927年

小柳篤二 「あとがき」 土屋先生の思い出　土屋先生記念会　P125　1962年

山村きよ　土屋先生の思い出　土屋先生記念会　Pp.55-57　1962年

山村きよ 「田舎の幼児を集めて」 幼児の教育　日本幼稚園協会　第26巻1月号第1号　Pp.30-34　1926年

土屋敏雄 「天塩にかけた『まさ』の思出」 土屋先生の思い出　土屋先生記念会　Pp.44-49　1962年

千女師附属 「幼年児教育研究会概況」 千葉教育393号　1月号　Pp.31-39　1925年

土屋真砂子 「幼稚園教育に於ける自然観察について」講演録音の一部（昭和三十七年四月十八日　真間山幼稚園において）土屋先生の思い出　Pp.23-25　1962年

参考文献

お茶の水女子大学幼稚園教員養成課程同窓会　日本の幼児教育のはじまり美登利會のあゆみ　美登利会 2015年
文部省　幼稚園教育九十年史　ひかりのくに昭和出版株式会社　1969年
千葉県立国公立幼稚園協会　千葉県国公立幼稚園のあゆみ　1988年
千葉縣教育會　千葉縣教育史　巻五　青史社　1941年